

山と博物館

第19巻 第4号 1974年4月25日 大町山岳博物館



土着の頃

撮影 千葉 彬司

穴釣りの果て

今年の冬は例年になく大雪と寒さのためか今まで凍ったことのない青木湖までが全面凍結した。

仁科三湖のワカサギの穴釣りは中綱湖と相場が定まっているが、年によっては木崎湖も凍結する。今年は三湖が凍結した。

凍結すると待ちかまえていたかのように釣天狗が押しかけ氷面のそこそこ穴をあける。気の早いのが、待ち切れずに薄い氷の上に乗り落ちかかったり、また、春先に氷がとけはじめているのに無理をして、釣りははじめて落ちこんだ話を聞いた。

幸いに死傷事故にはつながらなかったからよかったものの、万一のことを思うとゾットする。

このワカサギの穴釣り、多い日には木崎湖だけで一日六〇〇人以上の人が氷上で楽しんでたという。

冬の仁科三湖はアルプスおろしで身を切るような冷たい風が吹く。また、氷の上で何時間もじっと釣糸をたれていると骨の髄まで凍る思いである。これは一回でも穴釣をした経験のある人ならよくわかるはずである。

そこでいかに寒さから身を守るか各人が知恵をしばる。

石油缶に炭火を入れている人、ダンボールの箱をこわして屏風がわりにする人、簡単に木組みをして天井と側面にビニールの囲いをつけている人、ダンボールを何枚も重ねて敷きアンカを抱いている人、各々がそれぞれの工夫をして釣糸をたれている。

今木崎湖はさざ波が立ち、桜が咲こうとしている。岸辺や湖面には大は石油缶からビニール片まで、さまざまものが浮き沈みしている。ほかでもない穴釣りの時に氷上に残されたものが漂っているのである。湖底に沈んだものはこの何倍であろうか。何年も同じ事が繰り返えされると、今にビニールや缶が釣れるようになり、ワカサギがゲラゲラ笑うのではないかと思う。

(グチ猿)

虫たちの中の春 (2)

倉田 稔

日だまりの虫たち

春の陽気にうかされてるのは眠ることなく寒さをしのいでいた虫たちである。南風がふき雨だれがおちるような夜、ときおり電燈をめぐらして、ふとつたガがとびこんでくることがある。庭先の木の幹や枯木のうつろいの中で冬ごししていたキリガと呼ばれる仲間がである。体の大きさは1.5センチ程、体全体が茶褐色で、電燈のまわりをきこちなく2、3回まわるとぶきつちまに柱や壁へ突きあたるようにして止まる。



冬の晴れ間に木の幹にてきたフサヤガ

地味な色で、見つけにくい方で、県内にはこの仲間が何種類もいるが、どれも姿、形や

色が似ているので分類はむずかしい。しかし春先にもっとも普通にみられるのがテンスジキリガという種類である。

また、時おりキリガにまじってフサヤガや体の大きさが5倍位のフクラスズメというガがとんでくることもある。フクラスズメは全体が黒味の強い褐色で毛深く、翅を広げると6センチにもなる。しかし、翅には紫色の美しいはん紋があり、なかなか見のがせない珍品で冬のガの王様である。

このようなガがでた翌日はきまつて暖かであらぬ日だまりには枯草のにおいがあふれる。そんな時、日だまりへ行ってみると必ずといってよいほど、チョウやトンボがきている。日だまりによく見られるチョウはアカタテハ、キタテハ、ルリタテハなどで、どれも枯草や枯枝、崖のすき間などで冬ごししていたものである。

日だまりといっても、このころはまだ光が少ないので、チョウはもつと光がほしいと言わんばかりに翅をいっぱい広げて日光浴をしている。そして、時々、からだのあたたまり具合をたしかめるように翅を上下に動かしている。からだの十分あたたまると、しばらく枯草の上をきこちなく歩いた後、日だまりや枯草の上をゆるやかにとびあぐ。しかしすぐにもとの位置へもどり、日光浴をつづける。春がきたことを確かめて安心したかのようである。

これらのチョウにまじって成虫で冬ごしした珍しいトンボも時々顔をみせる。その名はオツネトンボ。オツネトンボは3センチ程の大ききで、体が細く枯草と同じ色をして

いるので余程注意してみると枯草の中から見つげだすことはできない。

オツネトンボも日があたたつている時だけ地面すれすれに枯草へ渡りあがっているが、

日がかげると忍びよるしく枯草の中へ身をしまめてしまふ。そして日没前には再び枯草の中へもぐり地面のぬくもりに身をまかせた。やはり本格的な春はまだなので、虫たちの活動も中途半端である。このような虫たちはつかの間の暖かきにとび出しても、よほど運のよいものでないと、すぐ逆もどりする寒さのために、ここへ死んでしまふ。だからこれらの虫たちはお病と思えるほどの注意深さで動きまわり、まわりの様子をさぐっているのである。やはり虫たちを本格的にとびまわらせるためには、暖かさばかりでなく、フキやネコヤナギ、スマレなどの蜜源植物が花を咲かせ、虫たちに十分な活動のエネルギーをあたえる準備が必要なのである。

虫をかりたてるもの

何といっても、再びもどることのない春が来ない限り虫たちは動きださない。行きつどもどりつした春も、どっつき腰をすえ、雪崩のあとも消えるころ、日一日と上昇する気温におく病だった虫たちもちゆうちよすることな



羽化しているシオヤトンボ、春一番のトンボである

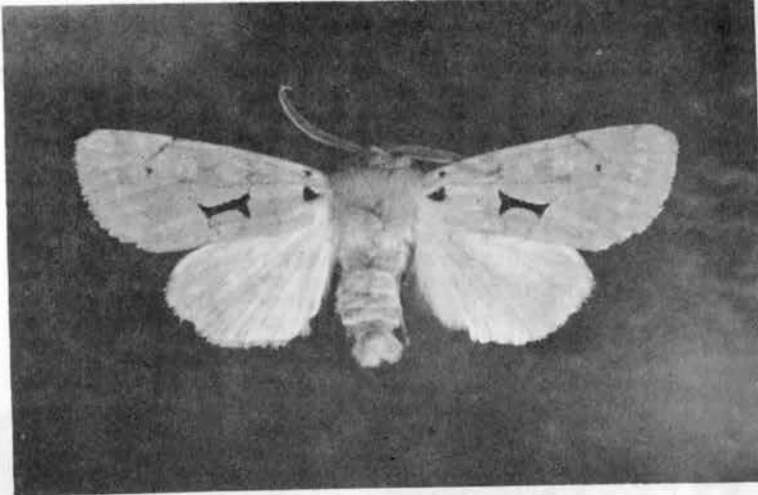
く、蜜や仲間を求めていっせいに野や山へとび出してゆく。虫の活動をあおりたてるのは気温ばかりでなく、仲間をもとめる欲求と冬の間消費したエネルギー補給のための生理的要求もそれに拍車をかけるのである。

春にめざめる虫たち

ひとときわにぎやかであった早春の虫たちが日だまりから山野へ姿を消すころ、今度は冬の間眠りつづけていた虫たちがでてくる。

こずえの餌場からくんだり地表の落葉の下や枯木のすき間で眠りつづけたマツカレハやカレハガの幼虫、枯草の中に眠っていたヒメウラナミジャノメやゴマダラチョウの幼虫もいっせいに目覚め、春の新芽を食べはじめた。また、蛹で冬ごししたモンシロチョウやアゲハチョウ、コツバメなどのチョウ類や水田の浅い水たまりで冬ごししたシオヤトンボのヤゴも春の日ざしの中でいっせいに羽化して行く。

雑木林のなかでは木の幹に産みつけられたクスサンやマイマイガの卵群からは真黒い幼



早春の羽化してきたアカバキリガ、翅はうすもも色で、既紋は黒の美しいカである

虫がぞくぞくとはい出して来る。このような春の目覚めは昼ばかりでなく、夜も盛んである。少し曇るような夜はどんよりしている。そんな夜には外燈や家の中の電燈がけて羽化したばかりの新鮮なガがやたらとどびこんでくる。大町市付近ではフユシヤクにつづいてみられるガはヤガ科のガである。その代表的なものがカバキリガ、シロヘリキリガ、スモモキリガ、アカバキリガなどで、どれも数が多く、色彩が豊かで美しいものばかりである。これらの虫たちは冬の間に訪れるつかの間、の暖かさでは決して動きださない。本格的な春をちゃんと知っているようである。一体どう

のようにして、春の訪れを知るのであろうか。虫をうごかす春

面白い実験がある。チョウやガの蛹と卵を秋にとつてきて、外の寒さにあてず暖かい部屋に保管しておく、幼虫や成虫が出るどころか、大抵のものは死んでしまう。チョウやコオロギを冬とおして長期間飼育したことのある人なら誰でも経験していることである。虫の活動をおさえつける冬の寒さは、一方では虫の発育を規則正しく発動させる重要なはたらきをしているわけである。だから冬の寒さのなかで一定期間生活することが、虫たちにとっては春へのパスポートになるのである。虫たちがこのパスポートをも

らいつ終るころ、まわりの景色は冬から春へいそぎ足で衣替をする。自然界の衣替は図1にあるように気温の上昇や日照時間の規則的増加また水の中であつたら水温の上昇という形で、直接虫たちのからだにふりかかってくる。パスポートをもらった虫たちにとつて、これら環境の一連の規則的变化は春の到来をつげるサインとなるのである。サインを受けた虫たちは交尾、産卵という春における重要な仕事のために全力で動きだすのである。

このようにして、春の山野にのどり出した純白のモンシロチョウやムギワラ色のシオヤトンボのすだちをみて、私たちは「春が来たのだな」という実感を得るのである。(飯山第二中学校教諭、山岳博物館嘱託学芸員)

「信濃路」特別号、竹にみる信州の民具(一九七三)七六ページに、

ミスズは……東信から南信へかけての山地には、スズ竹と一般によばれている細い竹が野生している。和名ミヤコザサがその大部分であるが、やや樹陰になつたところにむらがり生え、太さは鉛筆ぐらいから、それよりやや太いぐらいなもの、長さは二メートル内外。ぎつしりとむらがり生えて敷をなしており、このなかをなかなか通り抜けられないほどに茂っている……。とあつて、この文を読んでみるとスズダケ? ミヤコザサであると解説しているが、この二種は違った種であるばかりか、ミスズとは両種のいずれでもなく、ミスズ細工のタケは、信州人のいうネマガリダケ(根曲竹)、和名

ミスズ細工のタケ

室井 綽



ネマガリダケ 八幡平

のチシマザサ、いかめしい学名でいうとササ・クリレンシスなのである。雑誌「信濃路」は長野の郷土の読物としてあるいは信濃を天下に広く紹介するものだけによく調べて紹介してほしいものである。文中にあるスズダケというのとは高さ二メートル内外であるが、太さが鉛筆ぐらいの細いものである。また、ミヤコザサは高さ五〇〜六〇センチほどのものが多く、稈はスズダケより細く、半分か、それより細いものである

から、まず竹細工にはならない。さらに七七ページには、このスズ竹はヘイジクなどともよばれ、山のひとびとに昔から親しまれてきている……このスズの実は、また、ふしぎと凶年の年になることが多いので、ひとびとは山へはいって、この実をとり、飢をしのいだ。伊那谷の旧家などには、このスズの実を俵に入れて、凶年の用心のために貯えている家があるほどであつて、何年を経ても食べられるほど、保ちのよいものである……。とあるが、この頃の記事は白雲山人の「竹実記」(天保三年)にある通りシナノザサ、一名チマキザサのことである。

右の話のすじは著者白雲山人のいつて通る、実がよくなるので知られている。野麦峠の笹実は、近年では昭和一八年にもなつたことがある。当時、私も同時を訪ずねてみたが、私の見たところではシナノザサばかりで他の笹類には出あわなかつた。この昭和一八年には乗鞍岳を中心に開花結実した。当時は戦争中であつただけに小中学生などで勤労報国隊が組織され、いわゆる信州人が総出になつて実をとり歩いた。その実食料營



ネマガリダケの素材

団の手で信州人にパンとして配給されたこと
であった。

このシナノザサはよく結実し、高さがイネぐらいで採集しやすく昭和一八年には三百キロリットルも収穫された。しかし前述のネマガリダケでは背が高すぎて採集は困難であるし、果実が小さく固く食糧にするにはむずかしい。

さて、このスズ細工といつて信州の名物になつてゐるネマガリダケ、一名チシマザサは高さ三メートル以上になり、稈の基部が湾曲する北方系のクマザサの一種なので、この名がある。ときに稈の曲りからヘイジクともいわれる。

この信州に嘉永年間、岩手の某が、はじめに松本に来て当地産のネマガリダケ細工を伝授した(信濃教育会、信濃産業誌、明治四四年)。ことに笠類、手文庫、行李などの優秀品が作られたが、幸にしてネマガリダケの細工は美しいえ虫害がなく、材料が豊富にあ

るので発達した。

なぜ、この細工ものをミスズ細工というかということがあるが、ちよつと考えると信州には古くから「ミスズ刈る信濃……」という冠詞までできていて一つの名物になつてゐた。この信濃の冠詞を拝借してミスズ細工としたとも考えられるが、実はミスズ細工の源流はもつと歴史が古く、まったく別の流れをくんだものである。

実はこのネマガリダケの筍は食用筍としては細いが美味なので知られてゐる。この筍は細いところから信濃人からスズコと呼ばれてゐるが、それは筋子の意である。この筍を信州人は古くから食用にしたのである。それに信濃の名物などの紹介に堂々と名のならないのは何としても不思議と思つてゐる。いま、山菜について信州の古老と話しあうと、このうまい話は何よりさきに出ることである。それがか近年、志賀高原への登山道、ことにスズコへの道も開けて春の筍どきには好者でにぎわうようになった。

このネマガリダケは国立公園志賀高原の標高一〇〇〇〜一五〇〇メートルのところに密生し、六〜七月の筍時には幾組ものマイカー族の家族ぐるみが七輪持参でのり込み昼食がはじまる。付近で採つたスズコを早速剥皮してテンブラにするもの、長いまま味噌汁にするもの、鮭缶で味をつけるもの、焼筍にするものなど、どの家族の親も子も、どんな亭主関白もみんな懸命に平等に分担して食事の用意にあたる。

このスズコ料理の特徴は新鮮さと荒料理であつて、丸のまま切らない野戦料理にうまさがある。さらに筍狩りの一同が一致協力して汗を流して働くところに味が生まれる。もう一つの大きい特徴は、いわゆる筍のアクが〇・五パーセントという量で、ちよつとそのままがわれわれの最高の風味を感じる量なのである。

この国有林は佐久間象山が、ときの幕府

に志賀高原林野の手入れを命じられ、その代償にクツノ部落の人びとの入会権が認められて現在にいたつてゐる。幸いにして長野県民のうまいスズコを食う特権は幕府時代から今日に続いている。このクツノ部落には各自宅に温泉が普及して奥深い山地であるがそれが幸いして民宿も多く、いまでは住みよい部落である。

このスズコの味はずつと昔から信濃人は賞賛しスズコから語呂をよくしてスズコ、さらうまきに応じて接頭ミをつけて美称しミスズとよんだものである。したがつてずつと昔のことである。後世の文学で信濃の冠詞をつけることなどより食ふことはるかに古く比べものにならないことである。

最後に、信州人へミスズ細工としてもう一つぜひ紹介しておきたいことがある。それは日本の煤竹細工のことである。日本で、いな世界で、はじめて煙の中の煤をネマガリダケなどの竹材中に吹きこんで人工煤竹作りに成功した人が上田市の「チャコール信州」の主人宮島博敏氏である。近年、氏の炭焼窯の周辺に人家がたち並び町の中になつてしまつたので公害問題になやみ、その煙の処分を考えたあげく、ミスズを詰めたジュラルミンの箱の中に誘引し、この竹材に煙を吸収させることに成功したものである。この操作を一晚行つと、農家の天井で百年も、二百年間もかかつてできた煤竹と同一といふか、自由に曲げることができ素晴しいといふか、望ましいものができあがつたのである。この人工煤竹は切つて断面を欠けても、竹材中



ネマガリダケの煤竹

博物館たより

の炭素量を測つてみても、あるいは表面の光沢からみても、農家の天井でできた天然のものとの区別はできないほどである。

いま、広い日本に氏一人のみが人工煤竹作りが出来るのである。土産物店などでミスズ細工の籠類、茶花器などが陳列してあるから超信濃の土産をとくとご覧願ひおすすぬ願ひたいものである。(富士竹類植物園長)

人事異動 四月一日付、人事異動により、昭和31年より当館に勤務していた海川庄一学芸員(ライチョウの低地増殖等担当)は、扇沢総合案内センター所長として転出、後任に新卒の荒井今朝一学芸員補が着任した。

観覧料改訂

四月一日より次のように料金が改訂された
大人、一〇〇円 大人(団体) 八〇円、小人五〇円、小人(団体) 四〇円、団体は二〇名以上とし、大人は高校生以上。小人は、小学生である。

山と博物館第19巻第4号

発行所 長野県大町市TEL②②二二

印刷所 大町市下仲町山岳博物館

定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野一三、二九三)